

## 論文の内容の要旨

論文提出者氏名	西岡宏
論文審査担当者	主査 宇佐美真一 副査 栗田浩・福島菜奈恵
論文題目	Convex Bone Deformity after Closed Reduction of Nasal Bone Fracture (鼻骨骨折整復術後の変形治癒は突出側に残りやすい)
(論文の内容の要旨)	<p>【背景】鼻骨骨折は発症頻度が高いものの、手術は比較的容易とされ、術後画像評価も行われなことが多い。一方、鼻骨骨折整復後の変形治癒症例を外来で目にすることもある。鼻骨骨折治療後の変形治癒が、どの程度の頻度で、どのような傾向で生じるかは明らかになっていない。本研究の目的は、鼻骨形態を術前後に3DCT画像を用いて、比較検討し、変形治癒の傾向を把握し、治療結果に対する患者満足度調査結果との関連を検討し、治療へのフィードバックを図るものである。</p> <p>【方法】2010年5月から2016年1月までに当院を受診した鼻骨骨折新鮮例100例を対象とした。術前に骨折の形態に応じ、斜鼻型(両側)、斜鼻型(片側)、鞍鼻型、鞍鼻型+斜鼻型の混合型に分類した。手術は全身麻酔下に非観血的に行い、斜鼻型では陥没側を挙上後、突出側を潰した。鞍鼻型では挙上後に必要に応じて前頭突起の幅を狭く矯正した。混合型では先に鞍鼻型の矯正を行い、その後に斜鼻型の矯正を行った。術前と術後3ヶ月を経過した時点で3DCTを施行し、画像上変形が残っているか、骨のずれに応じて治療効果を3段階(優・良・可)で評価した。また、患者本人による、鼻形態の満足度3段階(満足・普通・不満)評価を受けた。</p> <p>【結果】術前術後に3DCTが行えたのは100例中86例(斜鼻型(両側)45例、斜鼻型(片側)8例、鞍鼻型12例、混合型21例)。術後結果が「優」が69例、「良」が17例、「可」は認めなかった。変形治癒が生じ、「良」の判定であった斜鼻型(両側)では6例全例に突出変形が残存し、陥没変形は認めなかった。「優」と評価された症例ではすべて術後鼻形態も「満足」と評価された。「良」と評価された症例では患者から一部「普通」と評価された。「不満」と患者に評価された症例は認めなかった。</p> <p>【結論】鞍鼻型、斜鼻型(片側)は整復位が良好なことが多かった。混合型は変形治癒を生じやすかった。斜鼻型(両側)では全身麻酔下に整復を行っても、突出側に偏位が残りやすい。またCT上の変形治癒に応じて患者満足度も変化し、突出側部分を指摘する患者が多かった。鼻骨突出側の治療は難しく、術者は術中に視覚的変化のみならず、超音波検査などを併用して、変形改善のための工夫が必要と考えられる。再手術の負担は大きいため、初回の手術で正確に整復することが求められる。</p>